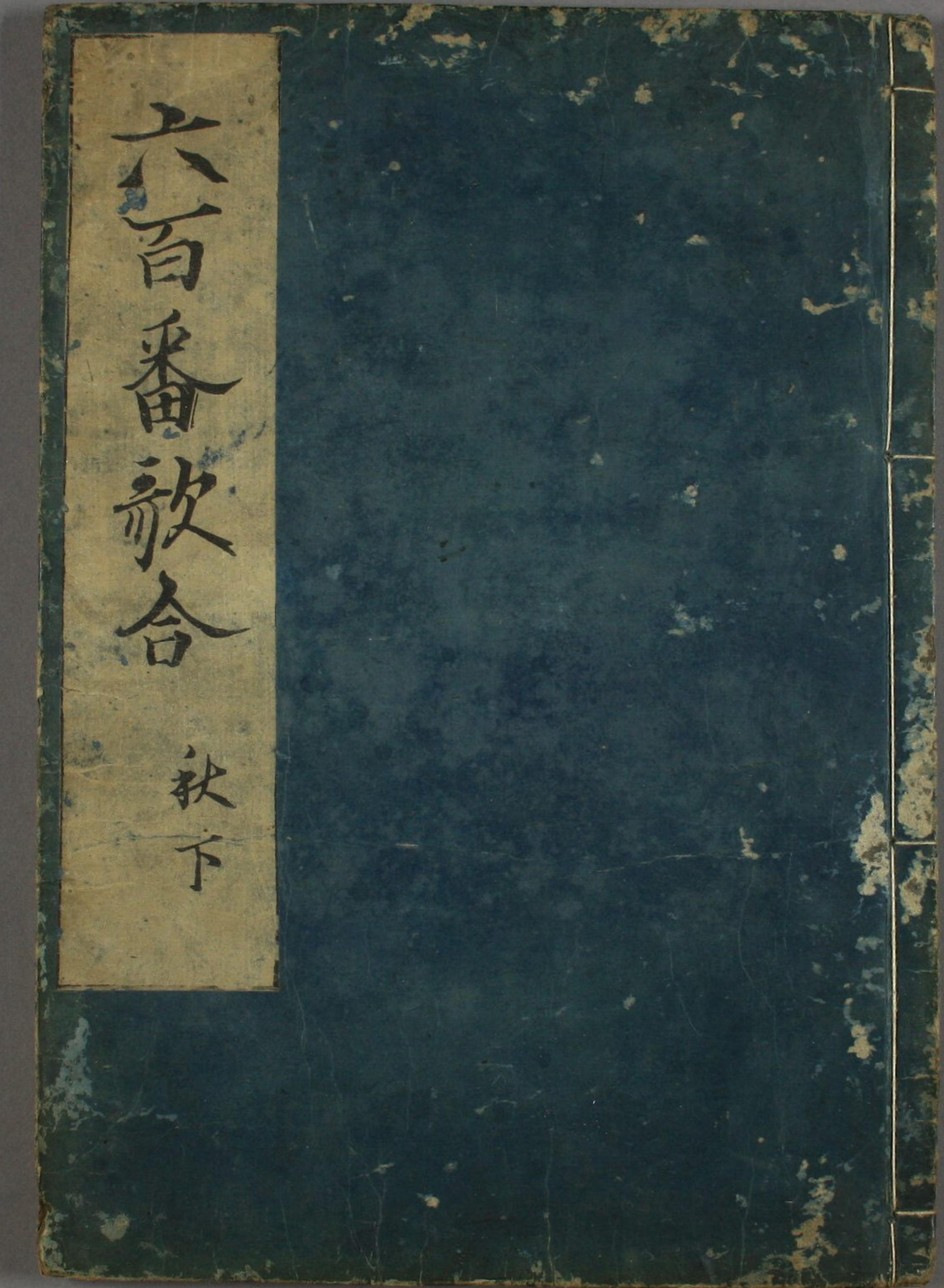


6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

六百番歌合

秋下





秋夕

庚寅九月

秋  
夜

葛

晴

壬辰



七番

左揚

秋夕

氣家明臣

秋夕よりは暮れ難よ其の爲く祀もありシタリと  
吉 滅却事  
多氣よりは暮りとて入去れ候うりとて麻乃神あらし  
吉よりは祀りとて入去り候うりとて麻乃神あらし  
そぞろの三念に左方ア云吉より衰と云麻の言  
あらんのちよりは又ス神とて入去り候  
ソゾ判云吉より是れ候うりとて入去り候  
もあらまへん候りとて是れ候うりとて入去り候  
もあらまへん候りとて是れ候うりとて入去り候

空氣丸卷五ノ一

侵きりて吉より入去り候うりと連とて  
可の御名稱かとてりとて實極とん組もとて  
左近とて候うん候とて

七番

左揚

空氣丸

夕霧小す種れ花に生えたりとて是れ候  
吉

空氣丸

暗き處乃々とて候うす墨小紙ふくらひとて一ツ  
上方ア吉とて候うれ候の候とよすんじてこれ九  
空をしのびてあらふ候うり左方ア云吉

うす墨まよあひすむ防事うり船タ乃ま  
えもりふきや判云左撇ク寧少く、さわと  
ひき左宗の方成るべしのまうす墨の絹  
ゑくへんを縫とせし左力揚

九番

左ね

頭眼

被とりてさくとも相のうかくよ々能しぬだまよ

右

中一宮精大主

相毎の相も多ま候う様な様にあらばタト言ふ  
左方門左京もも寄乃もセアリつまゆ云

中房也あくべりひくはだそそクノドキアレ  
ひそんましめの利云左京の官もん本の  
もまゆまよ相のうかく魚もまゆまの本  
もやゆんを相毎不秋うゆくと葉棄  
けとりづきうきくと本もくと相あくとく  
いもすゆんを相タマ事不くつう果もや今  
ゆくと魚もまゆのうちもすくふ紙り  
ゆくやねととくわ

十番

左ね

きぬ羽毛

又種らまやト葉も安かく安ハ被ノ被乃風

右

家達

書のまは壁もすひてよあみちく安ハ被乃風

左あ門左下ト葉とつ被あ成きうみ

井井生

左角のまえと左方ア云右奇凌芽う安よ  
歌くらやうふまゆの壁もすの紙よもゆく

おもくふまゆかくもくして壁もすひて

かくりづくめ判云左末よ萩どりそん為上

小ト葉うり事うねく小まき乃事よ

但そくやうじあよたまくしておとせゆく

書のまは壁もすひてよあみちく安ハ被乃風  
左ミシクんまのまよかく安ハ被乃風  
又野亭のまよかく壁もすひてよあみちく安ハ被乃風  
生ふかく野亭のまよかく壁もすひてよあみちく安ハ被乃風

十一番

如房

右

書のまは壁もすひてよあみちく安ハ被乃風

左くらやうすへきりかまくらひにまくら秋れな

信室

左右あやめをくわ判ふぬ方れ秋のうきを方くら  
うつまくとて袖アシムよも左上にのる  
あやの袖小ちとて云右ト向里と御里と秋乃  
タツトモうきうき苏文よもくうけ体確くへ  
此生一氣うきりあくへやゆくんのねととく

十二番

左 扇

宣家朝居

秋よたかあおどりもおと角へじまのものとく

床蓮

さあほくお鶴の萩乃きはまくわよけり夕雲を

扇あまこをねくわ判じる者もお絹とわくへ  
尼え竹絵右きののれもの萩の毛絹じんりくも  
狂風吹とやかゆくくんじねくはくくとえの  
十番のほくひや共の絵よ茶色のあくらひと  
約うとりハ紬ゆりめつとえ約う左絹情をと  
やゆくん

十三番 秋田

左 扇

宣家朝居

山田うねとくうせとふ風鶴くさとのじ根を阿くのとく

右

宣家朝居

外むりはもかへぬも纏まねて風をまわる山田と  
左のやえを移び左方ヤエ左のゆみ字より  
判云左あすのじゆつうりとらうのとくことねお  
カス子を取るのちくあつや左を吹かり  
下と打うちをよじた小もとがくくうせ  
されとまきうゆづりとくわくわく

丁申モヤ

十宣番

右

季経

春生ふとんから山田まさかとくわくひとく書つて  
ま

中官精大主

食くわが物を食とさうへ来て徳義よ風の吹け  
音方ヤエ左のゆみ字の小もやはくのちく  
左の奇経中事判云左あすの山田のひ  
この事成りのう小もやはくの山田の手と字  
ゆづりとくもはくはくよのく一経一業  
かくもゆき

十九番

右端

顯昭

きと道の高よもくう山もまきりとくにまくわく山田と  
山田の高よもくう山もまきりとくにまくわく山田と

右

席蓮

風海さん山田此店より高野へおもん旅そり御船  
右アシタモ船難左アシタ人をもあらぬ右隊云  
人をやどりすのうすり判左モをとのひこ  
あうとみふれの因をそり右モ船風高さ高所  
て船乗人をそり御社左右逃興一く無能  
情欲行右乃いよと人をそりん事ふくらむ  
ゆ后ヌモ病ひゆくし

ト音齋

とお

兼家絹右

右又其事卷ノ六

鶴と鷺の内事りふ高きもと此の世の如き事

赤峰

津うぬ山田れ高む秋之段あそハニ川船うるそより  
右アシタモ船難左アシタ人をもあらぬ右隊  
ト右判左モあう宿のひよどりく後小  
約めき伊勢船難左モ小舟や船難左人をも  
つづハおうトシテ竹生島と呼トヒツク事  
中くわざ事と左事心ありくハアシテ竹生  
津うぬ山田れ高むやうと左事と左事  
也

十七番左

宝家羽衣

東糸とも厚はうふと門田や編糸ふの匂い松の香り

右端

信宣

つまみかと高り袖ひきひし縞糸よむくうねの風  
右方や云門田ふくせよくばえじよとすの  
あくと高了とろひきひしや左下や右下すす宣  
く也判ひた奇右方難室裏を成角一右手の冠  
ひとかづく未だ即と拂て難来し竹籠ふへす

右端

十八番

左端

安房

山糸よ門田ふもる勢情よもとくにじよの

右

信宣

肴糸やのりく新ひ衣ひのひとれゆき袖よがひく  
右方や云厚すすや宣ふゆ左方や云左方の事  
事判ひたのち明の月右方肴大懃意  
ゆくとえひふとくとくの田乃木ハ勢情く  
とづくとくとくは役本のゆくはゆくよみづ  
じや月の役よ況じてハキシムシナヨミキモト  
不可解めう方もゆきし山をとと計子多

は源齋小かくえりも下為ゆ

十九番 鳥

右

顯服

あき松の風の涼かさの鷹の聲もかうやゆる

衣羽

中宮櫻衣丈

長弓は秋かく風の涼かさの月の月小鷹もかくすり  
右やく左矢御ふよめじよのりりくつ然鷹  
了若のあくも色挽ひはく波打つるよやく  
も秋鴉もくくわくくわくくくを下りくやく  
上鳥俊小みゆのえと判云左矢と、のれり事、右

今くはりそくやハ神乃秋夕の葉音にま  
不役耳のめう代曉乃時も小まくこくりあひゆへ  
一右弓袖入室へわくくはくくやハ中れのこ  
ニシロ雲竹里と右くとく勝よひしむ

二十番

右

空あ細弓

唐笠すと歸の扇乃簾まく袖より鷹のまくらがむ

右

信宣

弦也琴はれ衣とりけくまき鷹のまくらがむ

右やく左矢弓のまくらがみ事と來たりは乃

ゆへゆるはやとまのうけりきを判えあす  
絶たる者くら高例乃事うつ下袖しの鷹の  
ゆくもあよすと野の鹿とつるんとくも  
唐衣承をくらぬりやうて右鷹立野へい  
もんじく和子の表わしこねうさこひくとく  
不丁及絶歎絶神とり鷹のゆづる宣ひうへや

丁内家

二十一番

右端

主家綱口

御一とゆき宿えれきよ鷹立く秋のわくにとくわくを

五

右

主家綱口

御一とゆき宿えれきよ鷹立く秋のわくにとくわくを  
あちやむたあつまかづひんゆくくわくを  
事うれどまくのうすすなよ云吉お様とみゆふ  
もむくすゑく行車よや判士の鷹林のあと  
そのあつじく海の内うちかもゆれきくとく  
きとのやうべーはくと右の門田の鷹林よりも  
てゆくよくくらひすまよおながくへーく  
ちあくらひすま

二十二番

左の

五三章

右

達徳明臣

右の事はなき事でも御月よりはまほ行へ  
か云ひ方若あや休ひわらゆ井とあめう魂あ  
わゆくらうきひの口と耳かどら。右あはる  
ありと下へ熟すやえくらぐく。右の判えたま  
達あひ紙の下りくと御月と麦原伏元がと  
里乃むりう。全もとくのとくの田井とつよ  
むもとよとよみをりて右の御月とひへ侵

右の事は合五十

左の事は御月よと熟すやくそはいまく。半  
時ちと詠手ととくの山田とよくたまう  
」左小奇の傳うるゝとあるがよかとの  
ふかくそじゆす

二十三番

左の

兼家明臣

ひはくらくの事とて黙だぬひまう御やくの事  
右

麻蓮

はくくの事とて黙だぬひまう御やくの事  
右の事とて右の事とて右の事とて右の事とて

ぬまきやく強う事あまはよろちのあそれを  
との：おふくらやこすのりよしよしの鷹乃  
眼もくじくまゆるゆゑと筆事ありまよ  
ゆく事まくひるよやなへ袖えすすき  
うづふそゆまく強とす

二十室書

右端

女房

浪うすす海乃生戸毛とゆ傳うく風ふ三うり鷹乃

右

家譜

明とく海立鷹のくさうめくわいしひくねがうり

五三三

春乃うすす風ふとくしよのくふね  
くくや左方や云うく鷹乃ねまく  
あくくくくまれ枝をゆうりうとうとく  
りく判云左方難風よほんくふねうよく  
あくくくく鷹乃ねううのくくやくく  
組はううく芦毛の鶴ふとくのくくや  
もくん右方海立鷹のくわいしひくねがうり  
乃わくもの鷹乃くく

二十室書

廣津池鷹

右端

ま縁

きうり居りの里は度津乃池もくらみあむにうり

右 中宮様大主

度津乃池はもじ日秋の音相ひよよぎのわづを  
右やくと度津の音相度津乃池と右奇度津池より  
もねふもくつてかくらむる判云右の眺めます  
里小川流ゆるく一右左の傍

一千六番

左 ら

支那羽

度津乃池はも日秋に御重元月をやむな度津乃池

右

津曲

度津乃池

度津乃池はも秋もへ度津乃池もくらみあむにうり  
右やくと度津の音相度津乃池と右奇度津池より  
もねふもくつてかくらむる判云右の眺めます  
月とそやうりの音相度津乃池もくらみあむにうり  
度津乃池の音相度津乃池もくらみあむにうり  
月とそやうりの音相度津乃池もくらみあむにうり  
度津乃池の音相度津乃池もくらみあむにうり

二十七番

左端

左端物語

アモモサシシムホウハツカヘアモアヒシミテモテモハ

右

證信物語

月のとしをひふかわうと眼よひまつて月のれ  
右ヤムカタヒテ月の月よくはなトムを  
眼よほする月はのうもくやのうく汝判乞左内  
意の月とすようすくのええゆくすな  
あもくくとづくそりふもやおえゆる  
この世界と眼あよめぬうと約かくやく  
ひきくとせんきとすくわくとやくす

左端物語卷之十二

月よみとめま月の月と面白うめぐる  
心左端物語

二十八番

左端  
左端物語  
兼家明臣

緑扇のあらじゆのいふきとも月よ高す月の池

右

信宣

文林の明石もあらじゆのいふきとも月の池の也  
左端のあらじゆのいふきとも月の池の也  
と風きとめやつて風きともかくはのくらむの明石も  
あらじゆのいふきとも月の池の也

アラシニタガモス

二十九番

左わ

顎附

冬はの池をうら月が下へゆる

右

鼻蓮

直情とえあをもや清く松風をぬきは乃つて  
左右ノ音圓か利立意深にうた教まで  
ちく牧さん車の下のえもや清く松  
もくぬまをも活よばんと月清もとさか  
銅よりとこの音定といひを取くよ

ねねみよよくしん

三十番

左わ

女房

いはみよよそくはれ月よもじう音深乃池

右

家澄

ゆく歌ゆきよしよも音深の歌乃のよもじう音深乃池  
左音を精難判したの月よもじうしよじう下

かとうくわらわの音

畜

左わ

萬

ヨリモア

吉鹽本丸を立候はるゝもれのうれしにあつてよ當

右

家達

らくみよりの筆よたう山語か若林乃ちもやえうもん  
吉音ア云義と云はつてはるゝ吉鹽本丸の筆  
あら桂よさの左方ナミモアリテ之御判云  
左方義とはるゝのえりとりて御くわ  
果てこそ経よ出よゆるもきをすのまことひ  
つゝへわくとくわ

二番

右

顯昭

かづおれと聞かわが身につまふかのうきをだら

左角の書合ヨリ

右 胜

信宣

トと角く若よしもとをまかれてはわづき乃丈中  
左角云ニ角とくよりはの圓乃ももくじよ  
もくじよーとくらでくらむくすらじゆ  
左角云ひくとくと小角とく事一きられ事うり  
左角云ひくとくと小角とく事一きられ事うり  
と判云左角の圓乃ももくじよ小角とく  
うん事一きられ事一きられ事一きられ事うり  
かくもひきれ、やうり下さくや左角事一  
じくかくへはよとせりとあらまや上方わ

て右筆左の如く右へはふりまくと左に  
撤鉢左の如く右へはふりまくと左に  
左よ前より後より左へはふりまく右の如く

左ノ

三番

右

左腰

左腰左の如く右へはふりまく右の如く

中宮横左

左腰左の如く右へはふりまく右の如く

右腰

左腰左の如く右へはふりまく右の如く

右腰

四番

右腰

氣象腰

左腰左の如く右へはふりまく右の如く

右

腰

多き事無く縁もありまわらひをもあらずや  
左方や右方よどてほきくうりゆゑの萬を  
まよす左方や右方と例乃はの左  
あやうり不及難判云左方えの縁の事が  
うかがふきよくならきのりもとくに左  
右へまよぬ風神やうれり萬やうとう  
足もとぬく小魚ナリタマモノ萬の事  
の事あんが左方とす

口番

口ね

三あ耶

五十九五右合五ノ十六

萬の萬の事の口番も「うきねえ」と  
是

送信

とねうき萬の事の口番も「うきねえ」と  
左方を右方よどてほきくうりゆゑの萬を  
内歎うけらちあ一のをもとく右もとの  
の形えをうきねえの事の事ある一回字  
ともぐわ

口番

口勝

女房

山越へもむかう萬の事の事ある一回字

右

赤蓮

ゆきりきと白蓮のえとひまわをわのまづらぬつ  
風が利て左たる浦の浦を守るまくわは右へわ  
ゆきりきとひまわの浦を守るまくわは右へわ  
ゆきりきとひまわの浦を守るまくわは右へわ  
ゆきりきとひまわの浦を守るまくわは右へわ  
山のちひかとあく萬の枯木小秋月  
つうじ候故よゆきとひまわの浦も候ます

七番

作

た陽

兼家綱昌

私ども人を仰ぐふと川柳の筆よむ事一筆と

答

雅家

作家うしろ明めのあつねふとひまわを守るまく  
風の利て左たる浦の浦を守るまくわは右へわ  
ゆきりきとひまわの浦を守るまくわは右へわ  
ゆきりきとひまわの浦を守るまくわは右へわ  
不景うきよやた陽けく

八番

右

作家うしろ明めのあつねふとひまわを守るまく  
風の利て左たる浦の浦を守るまくわは右へわ

右勝

信宣

山あくす時氣のあくす作家うしろ明めのあくす

右方ヤ去馬本立事あへ一ノ事ニシテのう  
よまえのとれりあひキヤか判云左ニテおれ  
そくアヒヌ事のあひ乃れのきふもうゆのれ  
ノシカヒタクシトカムル事のま本立あへ一ノ  
トシ事のあヒタクシトカムル事の本立あへ一ノ  
事連々アヒテちきへんもだいと一ノ事連  
とくとくかく云間乃不干度事経る也但左事  
事不役耳シ以左平一の物

九番

左ね

左家朝局

左家朝局

左家朝局小野ひいと金井の葉やのそ

右

中宮精大主

千くまくえのと松木精大主御アツクアヒ  
左方ヤミカウチ指難歟左方ヤミカウチアヒ  
シヒトモ前御判云左の秋モ一こと御うらり抱  
はひひひひひんと度事あひうへ一右精大主  
シヒトモ前御判云左の秋モ一こと御うらり抱  
はひひひひひんと度事あひうへ一右精大主

十番

左ね

頭脳

右處かくの所毎乃ありぬじと若リトタマシ物を取

右

達信

山あらひのとく野小松ノ枝ノ風ふる葉ア林モシル  
立方ヤニ黒木根縄寺やわらし山脚石舟舟と  
此、おキテ房主ハ忽不見悟但本多小河源也  
アリカミシ人海よまんきの難波江の方アミ有  
多翁判云左岩がり舟レソノ事ハ不干及達信  
モチモ佐久の幼少棄せり。レソノ事ハ未だ有  
源小河シツシツナリ。右寺モ事ハ御前也  
キヨスカニ一時小山も多乃とすきう船よたゞ

支那より入港する金がスルキモニ御子モ

ねまくら

十一番

右端

如夢

根余る所ノ毛色也。而アヒト森ノ木葉也。其葉も

右

赤蓮

沙らまく様アヒト根也。其葉もアヒト根もアヒト  
立方ヤニ古事記。立方根也。アヒト根也。行  
トウモ軍事アヒト根也。立方根也。アヒト根也。  
アヒト根也。アヒト根也。アヒト根也。アヒト根也。

まわどりのう宣くわまくと不及里惟ラヘ方カ傍

十二番

左 流

定家網鳥

明る浪々人多よあらぬとうり事よ河く一今く、

右

家達

松浦山の小野の下葉のま乃ち鶴や鷺も草  
左者もよを歌うて判云左浪々人多よ象はす  
ソラ雲へほそく一絆の先やヒキよねむわゑ  
ゆくん右下葉のまのあやほしんとソラヒク  
ヒクニシテのれくま下葉もりまのあや

左右合二十

十三番

九月九日

顯昭

左 桂

まきの葉がくわる秋葉吹きまくろの紅

右

中宮櫻木

長月さかのれ日とつひわりまくろの紅  
右方やまそら風と吹不審左拂云義和風や義和  
うね葉々のひ葉風と吹不審左拂云義和風や義和  
ゆくふうのおりとくひ内ひやま拂と拂ひくひおひく  
ひよみれむり葉風と拂左拂や云右音をむる風

判はなき事かと云ひてはあつたりと申す  
あへりうきを義和渠より申す事一な  
事へ後檢査局も其より一申書あつて是へ  
アラシヨリ又は其の方葉集乃つてはる  
キヤウトヤリ其の理致有り事一ハナリソリ  
不許可と申す事無事の御よがんきこそり義和渠  
内閣の趣うれ述不却へるが下程一変せざれどもおま  
レ

十五

右

義和渠

四百一十一

奉申し此長月より今後とて三年とほり  
右  
右  
えう代うちうかびも萬よそく爲れ候りて御とあらんままでふ  
右や左に奇義和渠の方やあらかじめよ後檢査局松井  
うの葉よそく爲めと申す事へり御と申す事  
上よ世の事よ下よ申す事へり得也

十五

右

義和渠

キテツキヤツイ難の申事よ約一人の袖とみえを申

右

義和渠

左から右へ向うの事よりやうじゆくもあらぬ乃とね  
右から左へ向う難乃とゆきをうゆす左方から  
圓童はすうりんふうりくえのひがく精よき二面  
かの判官左へ難のところりんあくやの右又盡  
ようすりんあくやのうりんそくをうめく左面  
わどきんあく

十六番

左

宝鏡明月

左から右へ向う月とゆきをうじめのう

右端

燈籠

右から左へ向う月乃とゆきをうじめのう  
左右凡て持難くゆきと判官左端網を復す  
右左左手に持ててゆきと判官左端網を復す  
左右凡て持難くゆきと判官左端網を復す  
左右凡て持難くゆきと判官左端網を復す  
左右凡て持難くゆきと判官左端網を復す  
左右凡て持難くゆきと判官左端網を復す

十七番

左ね

金燈籠

左から右へ向う金燈籠を右端網を復す

右

麻蓮

左から右へ向う麻蓮を右端網を復す

右は左手を拂ひ取たる方や右のへねりせられど  
まく手判玉をも取かへりとつてもまよひ  
ちゆつて爲めかくすとくに何事あり酒を流  
あふるやせきとくを船のうみとくらひのうみ  
處あくやわんと右拂拂不分明也

十八番

右拂

書房

まれてよ給う一々の右拂は今御のえみを拂ひきく

右

信室

まくさくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

万葉集卷二ノ二三

事アホ左手拂ひ取たる方や右のへねりを拂  
左重はるあれを拂ひ取たる方や右のへねりを拂  
てうち物づくゆと左の左拂のえみを拂ひ取  
とぬりありやわん

十九番

秋翁

右

手拂

右拂えむ左拂ひ取たる方や右のへねりを拂  
右拂えむ左拂ひ取たる方や右のへねりを拂

右拂

信室

右拂えむ左拂ひ取たる方や右のへねりを拂  
右拂えむ左拂ひ取たる方や右のへねりを拂

右拂えむ左拂ひ取たる方や右のへねりを拂  
右拂えむ左拂ひ取たる方や右のへねりを拂

久判主の如島元充をめぐらすは威と  
む事に不及改進致入るのまえより不審もやむ  
御ん右乃風神を與て坐ゆ下わ等

一千番

左物

頭脳

えりかむきれど衣とぬくさりたまへ秋乃處あ

右

達者

春のゆき連うるの春ともも神聖ノ般やあみどし  
音のやへる聲とどきうちおひそかよ仰り  
左物云鷹乃と色どきひとを重きゆくゆとり也

周易

つねくよみのくもとし手すれぬよ云舊と車  
えんじは改めんくうのん事不無不審判左物  
考れど其ハ處もあふまゝリソリソリ然て物ノヘミ  
右あ其の聲のうき跡よ其やあすんとくの車  
聲をきくのみを仰り人まちも處れ字ナ  
ナシや右二句へ傳きう候方相不審ノ事ア  
ヤマトヘモ

二千番

左物

宣家相

毛利の義満もあよじと申すま御行と申す御

右

中宮権太史

秋の望れを経のとも枯れぬよめとこしむれまたあ  
右方や左方のまきはるやうに左方や右方の  
経難事え左方のまきはるよめつづる軍へきよえ  
めりや右方をまきしおりて深め傳りては  
えがくのやねよまきひきくまきくまきくまきく  
やくやくめりてめくづきのえぬた等すやけくく

左

二十三番

左

主家御名

主家御名

左

左

うすりまくも表へうそのうりあはれをくねて左  
右方や左方のまきはるやうに左方のまきはるや  
経難事え左方のまきはるよめつづる軍へきよえ  
めりや右方をまきしおりて深め傳りては  
えがくのやねよまきひきくまきくまきくまきく  
やくやくめりてめくづきのえぬた等すやけくく  
よけくすねどくくもや

二十三番

右

葉家明月

和氣あや姫をこもぐむとひんと羽えりの壁海乃  
藤家

右端

家清

つねまき船と矢とあめくも小あわくせん人の川の  
名前れを轟難くゆく判官たおせしのまほ  
傳ふはゆく右乃もよおなまくあくまくのうす  
のをあかぬとものまほりとまほよおむくと  
賜とてんむやゆくと年

二十三番

左名合五ノ二十六

左清

女房

あめくねあめくねの小葉の小葉の風は夜のうわくとよめく

右

清信洞房

宿すまはれよきくまくら姫のあ葉れやくのうを  
常めにとて處のゆよにゆくとわくとてちますえ  
きじなみとくの事や左乃とまほふとめのま  
まほみの判官と秋のあ葉れまほりとてまほ  
えよ月とれくとけくとけくとけくとけくとけく  
まほじととけくとけくとけくとけくとけくとけく  
まほじととけくとけくとけくとけくとけくとけく

二十九番

萬葉

左端

五言歌

長月の月も三月の朱雲も林葉もつれ故處もれり

右

桂樹

立海の立海の松や山の野の葉は葉は鳥もけまわ  
右す云々明乃は秋くれむつことじまつづくた  
強え夕富小林の葉むつらり乃にとくをよしと  
うへとくへふかゆがてよせかえとあるまろきと  
判太郎の宣ひへー

三十六番

五言歌ノニヒ

右端

毛多

右

達信網名

うけいのよきゆう物乃美のいはくとまをもしくじにじと  
右角や左角や左難右方や云の乃深みうきま  
えくん事もかの判云あすかく角をもくじをも

終ひえひ左端

二十七番

左端

頭脳

情の如くぬとまくのあくとくよ告ぐとくとく

右

中宮院とよ

ゆきよりや糸織れまゆしとおれく絲また草をめぐる  
左若生をもれんゆやくに刺方人若生難い  
うらはの麻あせく人よ告くに事めりす  
うや左の糸のまあくほむつてもえんくぬ  
りぬりのねくは

二十八番

右端

兼ふ羽衣

毛貫れまゆのうふかくぬう縫れぬひてあわりのふ

右

家譜

まくねむまちそくをきくゆく月の新を足  
用の判会たまゆのまくゆく後もまく  
右へくゆく月の新を足くとりそくれ寄き  
縫芳くねよけまくまくそくつるわく  
やくもあくやえゆりの左端とどく

二十九番

右

定家羽衣

農忙乃右より秋乃自新よりう黒く出れむを

右端

麻蓮

まくねぬくぬのまくねのうくまくのまく

おもよひをきの名よりめおと方カミをさす  
主事判シナガタおとねり秋ハサウエのとす  
可ハシ能ハシるもまことゆく秋ハサウエとまも  
玉タマのとすとくわくべつむち鳴ヒナギ!

す

三十一番

左 手

女房

秋ハサウエ今ハシの秋ハサウエは秋ハサウエとすとすと金カネ袖アラタハ耶

信宣

喜ハシめれどもへんひや秋ハサウエも今ハシの夕ハシめれども

喜ハシめれどもへんひや秋ハサウエも不ハシいゆ  
判シナガタおとねりとみの初ハシ秋ハサウエを惜ハシひうぐく  
やな方カミ人ヒト不ハシいゆや人ヒトを嘆ハシか云ハシび  
秋ハサウエとみの初ハシ秋ハサウエの因ハシもくらひやいと  
ええぬめの者ヒトの秋ハサウエ今ハシの夕ハシめれども  
御ハシありくわからぬよや仍ハシ芳ハシ丁ハシ年

右 手

